艦魂短編集『彼女たちの物語』

高島智明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦魂短編集『彼女たちの物語』

【Ｎコード】

Ｎ９４３４Ｋ

【作者名】

高島智明

【あらすじ】

艦魂。それは「ふね」を愛するものたちの語り継ぐ伝説……そんな短編をオムニバスに投稿していくつもりです。※皆様方の艦魂小説を読んでいる間に、想ったままの事を書いてしまいました。気軽に読み飛ばしていただければ、幸いです。※先行投稿いたしました短編『輪廻の「大和」』『五輪のプリンセス』も同じシリーズに属します。

短編その1『進水式』（前書き）

皆様方の艦魂小説を読んでいる間に、想ったままの事を書いてしまいました。
気軽に読み飛ばしていただければ、幸いです。

短編その1『進水式』

艦魂。それは「ふね」を愛するものたちの語り継ぐ伝説。
彼らは、彼らの愛する「ふね」に、命と心が宿ると信じた。
ゆえに、“それ”ではなく、“彼女”と呼んだ。
ゆえに、彼らは信じる。目に見えないだけ、耳に聞こえないだけ。
1パイの「ふね」には、必ず、1人の「彼女」が居る。
若く美しい乙女の姿をした、心優しき精霊。

依代となる「ふね」が水上に誕生するとともに宿り、
その依代が「ふね」としての生涯を終えるとその存在が消えるという、
その彼女たちを何が生み出してきたか。
もしも、それは「ふね」を愛するものたちの想いが生み出したのなら、
もしも「名」という「言霊（ことだま）」を受け継ぐときには、その命と心は受け継がれるのだろうか。

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊

命名書が読み上げられ、今日の「この」式典のために注文された、
儀礼用の銀の小斧が振り上げられて、檀上（だんじょう）の紅白の飾り綱に振り下ろされた。
式台の目前の舳先（へさき）に飾られていた薬玉（くすだま）が割れて開き、
紙吹雪が舞い散って鳩が飛翔する。
そして、命名された艦名を記した垂れ幕がぶら下がった。

「進水作業始め！」

軍楽隊によって高鳴る「軍艦マーチ」に負けまいとするかの様に号令が伝えられて、
やがて静々と船体が動き始めた。ドックの向こうの海へと……。

……。

…誰が見えていただろうか。
いつしか、甲板上に人影が集まっていた。
何故か帝国海軍の軍服姿の、若く美しい容姿の乙女たち。
それは「彼女」の戦友となる「フネ」を依代とする心と命が集まった姿だった。
そして、祝福する「彼女たち」の中央に光の粒子が集まって、
そして新たに生み出された乙女の姿を取った。

その間も「彼女」の依代と成った「フネ」は、海へと進み出ようとしていた。

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊

瀬戸内海西部、柱島停泊地。
内海の内側で更に幾つかの島々に囲まれた静かな水面。
「戦前」から太平洋戦争中期までの「当時」連合艦隊の集結地と成っていた。

「外海」に比較すれば波の穏やかな瀬戸内海は、出来立ての新造艦の試運転には都合が好い。
同時に「国内」である事は、秘密保持の上からも。
そのため、間近（まちか）の呉海軍工廠以外の造船所で建造された艦艇でも、試運転の時には柱島泊地へと回航されて来る事が、少なく無かった

……。

……。

…同時に、それは出会いの時と場所でもあった。
多くの場合、艦船は同型の姉妹艦が建造される。
例えば、戦前の帝国海軍であれば、戦艦や巡洋艦は同級４艦で戦隊を組むのが原則だった。

一方で「インフラ」等の問題、例えば、戦艦や空母程の大型艦ともなれば、
同時に建造できるドックが１ヶ所の造船所で１つしか空いていないという事が珍しくも無かったため、建造場所が国内各地に散らばってしまったりした。

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊

その時もまた、１隻の新造艦が進水後の艤装工事も終了して、
試運転のために柱島泊地へと回航されて来た。

その艦上に立つ１人の乙女。この艦の心と命である艦魂。
彼女を出迎えるのは、これから戦友とも成り、先輩にも当る現役の停泊艦たち。
そして「彼女」の「姉」たち。
彼女は、同型の姉妹艦４艦中の４番艦だった。

やがて、艦上に光の粒子と共に、出迎る艦魂たちが出現して彼女を祝福した。
その中央で「彼女」を歓迎する、何処かに面影のある「３人」の乙

女。

今、姉妹の出会いの時が来ていた。

短編その1『進水式』（後書き）

繰り返しになりますが、皆様方の艦魂小説を読んでいる間に、想ったままの事を書いてしまいました。
そんなオムニバスな短編を、ポツリポツリと投稿して行きたいとは思っていますので、
あまりヘコま無い様な温かい御意見、御感想を頂ければ幸いです。

短編その2『三笠ｉｎスエズ港』

スエズ運河の地中海側の出入り口である港湾都市ポートサイド。
その時、その港に運河の通行準備のために、１隻の艦船が入港していた。

戦艦三笠
日本海軍が大英帝国に発注した最新の、そして当時としては最大最強の戦艦である。

「その」最大が問題だった。
実際のところ「三笠」が砲弾以下の戦闘準備を整え、
石炭・食糧その他の消耗品を定量通りに搭載していては、
とても「当時」のスエズ運河を通行する事は無理だった。

したがって、運河を通過できる状態にするための作業が進行中だった。
運河を通過した紅海側の港で再び搭載出来る物は、同伴する艀（はしけ）に積み替えたりしていた。

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊

その艦尾、本来、この戦艦を旗艦とする提督が散歩するための施設である
Ｓｔｅｒｎ　Ｗａｌｋと呼ばれるテラスに、１人の少女の姿が在った。
何故かヨーロッパ系の容姿と、帝国海軍の仕官の服装という姿の。
この艦（フネ）の命と心である（艦魂）三笠だった。

※

艦魂。それは「ふね」を愛するものたちの語り継ぐ伝説。
彼らは、彼らの愛する「ふね」に、命と心が宿ると信じた。
ゆえに、“それ”ではなく、“彼女”と呼んだ。
ゆえに、彼らは信じる。目に見えないだけ、耳に聞こえないだけ。
１パイの「ふね」には、必ず、１人の「彼女」が居る。
若く美しい乙女の姿をした、心優しき精霊。

依代となる「ふね」が水上に誕生するとともに宿り、
その依代が「ふね」としての生涯を終えるとその存在が消えるという。

※

三笠は、砂漠の地平線へと延びる運河を見つめていた。
そして、その運河の続く先、これから自分の“故国”と成って行く、
未だ見知らぬ国を想い浮かべていた。

そして、その国で自分を待っているだろう「姉」たちを。
「三笠」は敷島型戦艦「敷島」「初瀬」「朝日」に続く同型４番艦
だった……。

……。

…１９００年（明治３３年）１１月８日。
イングランドの内でのスコットランド寄り、アイルランドの対岸に
所在する
ヴィッカース社の造船所で、戦艦「三笠」は進水した。

その時（艦魂）三笠の誕生を祝福してくれた艦魂たちは、当然の様に英国人ばかりだった。

そして「三笠」の「姉」たちも、英国国内とは言っても別々の造船所で建造され、
その上「この」時点では日本へと回航されていた。

それでも「三笠」を受け取るべく日本から遣って来た男たちが、例え「彼女」が見えなくても
「彼女」の存在を信じ、三笠を愛そうとしていた……。

……。

…やがて「彼ら」と共に、三笠が旅立つ時が来た。

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊

ようやっと、運河をすり抜けた「三笠」は紅海側のスエズ港で、
地中海側で降ろした何やかんやの再登載中だった。
これだけの手間を掛けても「当時」のスエズ運河を通過出来るのは
「三笠」でギリギリ、
そこに「三笠」の「最大」の意味が在った。

やがて「三笠」が戦うバルチック艦隊は、
すでに戦争中であるため戦闘準備状態だった事も手伝って、
スエズ運河を通過出来ず、遠くアフリカ大陸を迂回する羽目に成る。
そこまで計算の上で「最大」を、帝国海軍は発注した。

すでにして「三笠」が英国を出発した時、日露開戦まで2年を切っ

ていた。

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊

やがて、出港準備を終えた「三笠」は再び碇を抜き、紅海を巡航して行った。
紅海からインド洋、更に南シナ海を経て太平洋へ。
その行く先に目指すのは日本。

（艦魂）三笠にとっては、初めて目前にする「故国」
そして、これから戦友と成って行く仲間たち。
そして…初めて会う3人の「姉」

それらの全てが、その時、三笠を待っていた……。

……。

…1902年（明治35年）5月18日
「三笠」横須賀軍港に到着。

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊

その同じ港、横須賀。
記念艦「三笠」は、今も存在する。
そして…「彼女」三笠も。

短編その２『三笠ｉｎスエズ港』（後書き）

御意見、御感想をお待ちしております。

短編その3『南極帰りの黒1点』

かつて、帝国海軍が艦名の命名基準を設定した時、明治天皇はおっしゃったそうである。
「沈んだりしたら故人に失礼」
その結果、日本海軍（海上自衛隊も継承）では、人名を艦名に使用して来なかった。

欧米では、むしろ故人を讃える意味とかで、人名を使用して命名する場合が多い様だが。
一方、日本では人名を使用しない事もあって、女性名としても違和感の無い艦名が多い。

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊

艦魂。それは「ふね」を愛するものたちの語り継ぐ伝説。
彼らは、彼らの愛する「ふね」に、命と心が宿ると信じた。
ゆえに、“それ”ではなく、“彼女”と呼んだ。
ゆえに、彼らは信じる。目に見えないだけ、耳に聞こえないだけ。
1パイの「ふね」には、必ず、1人の「彼女」が居る。
若く美しい乙女の姿をした、心優しき精霊。

もしも、「ふね」を愛するものたちの想いが生み出したのなら、
もしも「名」という「言霊（ことだま）」を受け継ぐときには、その命と心は受け継がれるのだろうか。
だとしたら、あの「ふね」は…

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・

＊・・・＊

欧米では、むしろ故人とかを讃える意味で、人名を使用して命名する場合が少なく無い。
その場合、その名前を呼ぶ方は、どんな言霊（ことだま）を込めているのだろうか。
特に、その故人が男性だった場合。
まさか、輪廻転生を否定するがゆえに「彼女」を「彼」の名で呼ぶ、と言う事なのだろうか。

「その」矛盾を回避するため？
日本海軍は、女性名でも違和感の無い艦名を選択し、故人の名を選ばなかった。
今の海上自衛隊でも、例外は南極探検艦「しらせ」位だろう。

＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊

今年も、南極から「しらせ」は帰国して来た。
そして、南極が夏へと向う北半球の秋までを過ごす母港へと戻って来た。

その「しらせ」を出迎える「戦友」たち。
この探検艦を運用する海上自衛隊の自衛艦に宿る「乙女」たちが「しらせ」の艦上に転移して来ていた。
果たして、誰かに「それ」が見えていただろうか。
しかし「彼女」たちを愛する者たちは「彼女」たちの存在を信じる。
その乙女たちに囲まれて、黒1点とも言える“男性”が照れていた。
何故か、明治時代の陸軍中尉の姿をした“彼”。

白瀬矗

日本における南極探検の先駆けと成った陸軍中尉
南極探検艦に相応しい名前が一般から募集された時、
最も多数が相応しいとしたのは、白瀬中尉の名だった。

短編その3『南極帰りの黒1点』（後書き）

御意見、御感想をお待ちしております。

短編その４『天命を全うする時』

艦船の耐久年数は、２０～２５年が目安とされる。
それを超えて使役し続けようとすれば、年齢延長それ自体を目的とした“大工事”が要求される。

まして「後述」するような理由で、元々、数年の使役年数しか期待されて無かった船が、
それも「彼女」を生み出し使役する国家そのものが、
１たび敗れて滅びた時代を超えてまでの２０年、
それは「彼女」にとって、天命を全うした２０年だったろう。

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊

昭和３９年（１９６４年）大晦日
青函連絡船「第七青函丸」は、最後の運航を勤めた……。

……。

…そして「彼女」にとっては、最後の場所となるドックへと回航された。

「フネ」を愛する男たちは信じた。
彼らの愛する「彼女」に宿る命と心を、
１パイの「フネ」に必ず１人宿る、若く美しい乙女の姿をした精霊を。

依代となる「フネ」が水上に誕生するとともに宿り、

その依代が「フネ」としての生涯を終えるとその存在が消えるという、
その「フネ」が解体され、やがて別な鋼材に転用されて、依代そのものが消失した時
果たして「彼女」たちは……

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊

彼女。「第七青函丸」の魂は、自分の身体から少しずつ解(ほど)けて行く光の粒子と、
今や、建造時を逆に辿(たど)っている分身を見つめながらも、恐怖よりも満足を認識していた。

彼女の想いは、過ぎ去った日々に、そして
おそらくは「天の向こう側」で自分を待っているであろう姉妹たちへと向っていた。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

第２次世界大戦（ＷｏｒｌｄＷａｒ？）の最中。
艦隊決戦を求め続けた日本海軍も流石に気付かされた。
日本のような島国にとっては「この」戦争が、資源を運ぶ海上輸送の戦いでもある事に。
気付かされた海軍は、輸送船の建造を民間を含めて統制し、急速大量に建造しようとし始めた。
そうまでして、海上輸送を維持しようとする意図であるからこそ、
青函連絡船だけは「鉄道フェリー」とも言うべき特殊構造の船から変える事は出来なかった。

港に到着した貨車から1たん貨物を降ろし、バラ積みの貨物船に積み直して海峡を渡り、
海峡の反対側の港で貨物船から1たん降ろして貨車に積み直す。
そんな手間をかけてはいられなかった。戦時中なら尚更。

貨車に貨物を載せたまま、レールを備えた船内に列車ごと引き込む。
そして、海峡の反対側で、またレールに接続して送り出す。
「これ」以上の効率を要求するならば、
列車が自走して海峡を越えられる様な橋かトンネル位だろう。

かくて、戦時急造型の「鉄道フェリー」船「第五」～「第十二青函丸」が急造された。
何と、エンジンの信頼性などは、わずかに3年。
戦争が終わるまでには、何隻かは撃沈される前提の消耗品だったのである。

悪い予測ほど当るものなのか。
昭和２０年（１９４５年）７月１４日
「この」日米戦争での「必殺兵器」と言っていい「エセックス」クラス空母が、
津軽海峡に襲い掛かった。
「第六」「第七」「第八」「第十青函丸」の姉妹たちを含めた連絡船１２隻中８隻が撃沈、
残りも航行不能と成り、北海道と本州の物流は断ち切られた。

それでも、船乗りと鉄道人たちの誇りにかけて「第六」と「第八」
そして「第七青函丸」は蘇(よみがえ)った。
７月２５日「第七青函丸」復帰。

たが８月１５日、日本は敗れた。

＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・＊・・・

「彼女」は回想していた。

国家が敗れて後、輸送船である「彼女」には、真の戦いが待っていた。

「彼女」は運び続けた。

ある時は、復興のエネルギーと成る石炭を北海道から南へ。

ある時は、寝台列車と共に北へ南へと旅する「お客様」を乗せて。

時には悲劇を乗り越えて。

「あの」悲劇の嵐は「彼女」からも「妹」の１人「第十一青函丸」を奪っていた。

「彼女」は運び続けた。

「彼女」と共に海峡を渡った船乗りや鉄道人たち、そして旅人たちの思い出も同時に……。

……。

…いつしか、２０年が過ぎていた。

「第七青函丸」の竣工は昭和１９年（１９４４年）７月１０日。そして、就航は同年７月２０日。

戦争が続くまで動けば好い程度の急造船でありながら、戦争が終わった後も、

祖国が復興するために運び続けていた。

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊

「彼女」は待っていた。「天」に還る時を。

昭和３９年（１９６４年）の冬。
すでに「第五」～「第十二青函丸」の姉妹の内で「彼女」、
「第七青函丸」だけが青函航路に残っていた。
その「彼女」も、その年の大晦日をもって「引退」を迎えた。

戦時急造船でありながら「戦後」までも運び続け「天命」を全うした２０年だった……。

……。

…昭和４０年（１９６５年）のある時、
「彼女」は「姉妹」たちの待つ処へと還った。

その時、かつて「彼女」が運び続けていた海峡の更に地底では、
男たちの「プロジェクト」が進行していた。

短編その４『天命を全うする時』（後書き）

御意見、御感想をお待ちしております。

短編その5『母なるフネ』（前書き）

今回のキャラクターにつきましては
『真・恋姫†無双』に登場する黄忠母娘からのインスパイアがあります。

短編その5『母なるフネ』

潜水艦という艦種は、水面下に隠れる“ステルス”能力のために、
他の全てを犠牲にしている。
乗組員の日常生活まで含めてである。

まして、第２次世界大戦（ＷｏｒｌｄＷａｒ？）の時代までは、技術上の皺寄せが乗組員に被っていた。
停泊地まで戻った潜水艦が母艦に横付けされる。
潜水艦長とかは、戦隊旗艦でもある母艦へ報告に行っている間、乗組の水兵はと言えば、
出撃中は魚雷の上に寝ていた身体を、母艦の宿泊施設で休息させる。
あるいは、風呂に入りに行く。シャワーが設けられたのは、原子力時代の話だ。
あるいは、水兵服を洗濯する。潜水中には洗濯の余裕すら無かった。
あるいは、酒保（艦内売店）で買い溜めをする。
潜水艦とは、酒保商品を積む余裕すら犠牲にして「ステルス」を獲得していた。

まったく、潜水艦乗組の手当が、水上艦艇の同階級の水兵より高い訳だった。
客船を徴用して使用する様な施設を搭載した母艦が支援して初めて、
潜水艦は「海の忍者」としての、真の力を発揮出来た。
流石に「戦後」はＷＷ？の時代に比較すれば、まだマシだったが。

ちなみに、西暦２０１０年現在の日本には「潜水母艦」という艦種の艦は無いが、
それは、浮上出来なくなった潜水艦から、生存者を救出する施設を搭載して

「潜水艦救難艦」という艦種で登録されているからであって、
「事故」の無い時は“母艦”として潜水艦の世話を焼いている。

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊

その時「潜水艦救難母艦」『ちよだ　（ＡＳ－４０５）』に搭載された小型艇が、
同じ『ちよだ』の名で命名された。
ＤＳＲＶとは、任務中に浮上出来なくなった潜水艦の生存者を母艦まで連れて来る目的で開発された小型潜水艇である。
潜水艦救難母艦「ちよだ　」は、このＤＳＲＶの搭載能力と、潜水艦を支援する潜水母艦の能力を併せ持つ艦だった……。

……。

…母艦の定位置に固定されるＤＳＲＶを、
誰が気付いていただろうか、１人の母性的な女性が見守っていた。
この艦の命と心である「艦魂」ちよだ（母艦）だった。

潜水母艦と言う艦種の任務と特性のためか、
潜水母艦の艦魂は一般的に言って、母性的な女性が多い。
少なくとも、潜水艦の艦魂相手だと、本能的に母性的だった。
まして、同名のちよだ（ＤＳＲＶ）は、彼女の分身と言っても好かった。

そして「ちよだ（ＤＳＲＶ）」が命名された瞬間「艦魂」ちよだ（母艦）の腕と胸の中に、
見た目は幼いが可愛らしい姿が出現した。

「ちよだ（ＤＳＲＶ）」の命と心である、言わば艇魂。母なる艦は正しく娘を持っていた。

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊

潜水艦という艦は、言わば人工的に沈没する艦とも言える。
訓練するだけでも、危険とは無縁とは成らない。
したがって「救難」の訓練も欠かせない。

その日も「ちよだ」では、救難訓練が行われた。
人間側で、訓練後の反省会が行われている時、同時に母艦上のある場所でも、
同様の会議が持たれていた。

とは言え、先ずは恒例の儀式から始まる。
「褒（ほ）めて褒めて」と見た目は幼い「娘」が「母」に要求する。
これに対して微笑みながら、頭を撫（な）でてあげる姿は「母」に違い無かった。
「この」儀式の後で「救難される」役だった潜水艦の艦魂を交えて、
真面目な反省会には成るのだが。

その間にも、ちよだ（母艦）が、自分の「娘」だけでは無く潜水艦の世話まで焼きたがるのも、
また恒例だった。
潜水母艦の艦魂とは、潜水艦の艦魂相手だと、本能的に母性的なのだ。
ちなみに「艦魂」ちよだ（母艦）が潜水艦の艦魂に何か食べさせている時には、
「ちよだ」から潜水艦のバッテリーへと充電が実施されていた。

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・
＊・・＊

「ちよだ」の艦内には、自体の乗組員以外に、潜水艦1隻分の休息室が設置されている。
特に、今回の訓練が「救難」だっただけに、反省会の後で潜水艦の乗組員たちは
母艦の休息室で身体を伸ばしていた。

そんな何時もの光景。
それが「この」時だけは、違っていた。

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・
＊・・＊

反省会も「お開き」に成りかけた頃、意外な通信が傍受された。
ロシア領カムチャツカ半島の周辺で、ロシア海軍の通信が飛び交っていた。
その時、２００５年８月４日
この時、半島の沖合いで、ロシア海軍の深海救難艇が行動不能と成る事故が発生していた。
そして、乗員７人が深度１８０ｍで閉じ込められていた。

＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・＊・・
＊・・＊

「まま」不安そうな「娘」を見て、しかし「母」の方は勇気を与え

られていた。
「大丈夫よ」それから、艦魂としての使命を表に出す。
「出動する事に成るかもね」

5年前（２０００年８月１２日）原子力潜水艦クルスクの乗員全員を失っていたロシア海軍は、
今回は、速やかに各国海軍の救援を求めた。

「ちよだ」の艦内には、横須賀基地に居合わせた潜水艦の艦魂たちが集まっていた。
「彼女」たちにとっても「他人事」では無い。
それが、潜水艦の宿命だった。
集まった乙女たちの誰もが、ロシアの乗組員の無事を願っていた。

8月5日
ロシア海軍からの依頼に基づいて、海上自衛隊は出動した。

同日１２時
海上自衛隊、横須賀基地。
潜水艦救難母艦「ちよだ」は同基地から現地に向った。

同時刻
「ちよだ」艦内。
詰め寄せていた潜水艦の艦魂たちが、ちよだ母娘に1言ずづ言葉を交わしては転移して行く。
そして、潜水艦バースに係留されていた分身に戻ると、その艦上から帽子を振っていた。
「彼女」たちにとっても、ちよだ（母艦）は、優しく世話焼きな「母親」だった。

もっとも潜水艦だけでは無く、居合わせた自衛艦や米軍艦までが「帽振れ」や敬礼で見送った。
そして、救援の成功を願っていた。

さらに掃海母艦が掃海艇2隻を従えて合流する。
行先は、ペトロパブロフスク・カムチャツキーの沖合。だが……。

……。

…8月7日の朝早く、イギリス海軍が空輸した無人潜水機が先に到着、
その支援によって自力での行動を取り戻していた。
結果、乗員全員と共に無事脱出した。

同日15時
「ちよだ」たち、派遣艦隊は帰国する事に成った。

「ふにゃ」
急に外見相応の甘え方で「母」に甘える「娘」だったが、
そんな「娘」に優しく甘えさせながら「母」の方は、
優しくも嗜(たしな)めていた。

「これで好いのよ」
無駄足であれば、その方が好い。
「救難艦」の任務と言うのは、そういう物だ。

そして「母艦」としての「世話焼き」な日常が戻って来ようとしていた。

短編その5『母なるフネ』（後書き）

御意見、御感想をお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9434k/

艦魂短編集『彼女たちの物語』

2011年10月5日18時42分発行